

見つめる目 しなやかな心 医療を支える 看護の手	看護部だより	2016 年 01 月号 第 297 号	特定医療法人衆済会 増子記念病院 看護部 部長 上村 志磨子 (認定看護管理者)
--------------------------------	---------------	----------------------------	--

あけましておめでとうございます。



「看護」について語り合おう！



看護部 部長 上村 志磨子

平成 28 年度の干支は、申です。ある占いによると、申年の人は「明るく人づきあいが上手で、悪い空気を変えられるポジティブ思考を持った人」だそうです。天才肌の側面もあるとか、当たっていますか？

また、申年に履くと縁起がいいとされている「赤いパンツ」。

昔から「申年に赤いパンツを履くと、歳をとっても人に下（しも）のお世話をしてもらわなくても自分で出来るようになる」と言い伝えられています。

1 どんな 1 年でしたか？

さて、みなさんにとって平成 27 年は、どのような 1 年でしたか？充実した最高の 1 年でしたでしょうか？それとも何かやり残したことがありますか？

1 年 365 日はあっという間です。年を重ねるごとに、一日一日が大変短く早く過ぎてしまう感じがしています。その時どきにおいては、自分の体調や気分にあわせてできる限りのことをしてきたつもりでした。しかし、27 年の目標が未だ達成に至らず苦慮しているということは、少々努力が足りなかったと反省しているところです。それなのに、無謀にも今年もまた新たなチャレンジを始めようと考えています。これは、制約や期限がないので楽しみながら自分ペースで取り組もうとワクワクしているところです。

是非、皆さんもこの機会に昨年 1 年を振り返り、どのような 1 年だったのか、今年にどう繋げるのか考えてみてください。

2 看護部の目標

仕事でいうならば去年より今年、今年より来年と一年一年何らかのスキルアップがなければいけません。

平成 27 年度の看護部の目標の一つに、「信頼される良質な診療を提供するために、看護職の役割と責務を明確に示し 当院が目指す看護を実践する」としました。これまでに、こうした目標をこの「看護部だより」や「のぞみの会」、院内研修の場で伝えてきました。

3 看護に対する他からの反応

患者さんやご家族の方から、医師や他職種の皆様から、当院の看護についてお褒めの言葉をいただくことがあります。大変嬉

しいことです。看護部の皆さんに感謝しております。

多くは、お褒めの言葉ですが、時に残念な評価もいただきます。これは、チャンスです。立ち止まって考えることができます。「何がいけなかったのか」、「どこに問題があるのか」、「今後どうすればよいのか」。そして、対策を練ったら実行あるのみです。その結果、いつの間にか良い評価に繋がっていくと思います。

4 各部署で話し合おう！

平成 28 年がスタートした節目に、いま一度考えてみてください。①「看護職の役割と責務とは何か」②「当院が目指している看護とは何か」。できましたら今月中に、部署ミーティングの時間を使い話し合ってもらいたいと思います。また、日常の業務の中で、自分たちが実践している看護についてもっと語りあってください。看護を語ることで、お互いの看護力を高めていってほしいと願っています。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

以上

学生コーナー

笑顔の似合う看護師になるために

外来学生 丸田萌依

高校を卒業し、右も左も分からないまま、外来学生として勤務をさせていただき、もうすぐで 2 年になります。入社当初や、1 年前に比べて出来ることは増えましたが、まだまだ新しいことが多く勉強の毎日です。学校でも毎日授業や演習を受け、学ぶことだらけです。その中で今年は 2 つの実習に行きました。

実習を通して、コミュニケーションの難しさや、個別性のある看護の大切さを実感しました。同じ疾患で、同じ性別、同じ年齢の患者さんがいたとしても全く違う一人の人間であり、同じ援助になることは無く、患者さんが求めていることは個々によって異なります。

また、「私だとして欲しいから…」や「これをしてあげたい」といった自分の主観だけで援助計画を立てず、患者さんの入院前の生活などの社会背景、どこまで求めているのかを理解し、過度な援助にならないようにすることが患者さんの退院後の生活にも影響し、重要なことだと思います。その為にもっと患者さんと関わりたいと思うようになり、積極的にコミュニケーションをとるように心掛けました。

患者さんと関わっていく中で大切なのは表情だと私は思いました。『笑う』と言う行為は免疫力を高める」と聞いたことがあります。勤務中では一人の患者さんと関わる時間は限られていますが、「ここに受診して良かった」と思ってもらえるような関わりを持ちたいです。

毎日沢山の患者さんと関わりますが、「こうすれば良かったかな」と思ったり悩んだりすることもあります。これから看護師さんや先輩を見て、たくさん吸収をして学び、一度学んだことは次に生かして、同じ後悔や失敗を繰り返さないようにしていきたいです。

数年後、自分がどのような看護師になっているのか全く想像もできませんが、まだこれからたくさんの実習や仕事の日々を重ねていく中で見つけていきたいです。

支えて下さっている皆様に感謝して、笑顔の素敵な看護師になれるよう頑張ります。

以上

『看護師』という職業を目指して

外来学生 濱崎里菜

看護学校に入学してもうすぐ 2 年が経ちます。2 年生になり、授業も専門分野の内容が増え看護についてさらに知識が深まってきました。仕事も 1 年生の頃と比べると出来る事が増え、学生の立場としてのやりがいを感じています。そして、今年度の実習を 2 つ終え、2 年生も残りわずかとなりました。

私はこの 2 つの実習を通してコミュニケーション力がないことが分かりました。笑顔で対応することはできても、適切な言葉遣いや表現の仕方が見つからず対応に困る場面が多くありました。

そこで見本となるのが外来部署にいる先輩看護師さんたちです。私が分からないことがあり尋ねると、いつもの確かな指示やアドバイスをくださります。患者さんに対しても笑顔で対応し、患者さんとの信頼関係も築けており全ての方に平等に接しています。

当たり前のことかもしれませんが、皆が全て出来ることではないと思います。これから私も先輩の行動を見習いながら、色々な方とうまくコミュニケーションがとれるようにしていきます。

そして実習を終え、命を預かる「看護師」という職業の責任の重さを改めて実感しました。

自分が行う行動 1 つ 1 つに責任を持たないとそれが死につながることもあります。これは、医療従事者全ての人に共通して言えることだと思うので、報告・連絡・相談をきちんと行うことが必要だと感じました。

私事ではありますが、先月、祖父が他界しました。

物心ついてからの身近な人の死は初めてだったのでとても考えさせられる出来事となりました。遠方に来ているため高校卒業後会える回数が減り、そばにいてあげられず、何もしてあげられなかったのが自分の立場と未熟さにはがゆい気持ちでいっぱいでした。

祖父の死を通して残り 2 年間頑張ろうと思えたので、自分の行動・言動に責任を持ち過ぎていきたいと思います。責任を持って行動するためには、正しい知識と確かな技術が必要になってきます。

私にはまだ全てが備わっているわけではないのでこれからの学校生活や仕事を通して培っていき、免許取得後より良い看護が提供できるよう毎日一生懸命頑張っていきます。

以上

部署報告：訪問看護ステーション

困難事例での他職種連携、認知症介護者との関わりからの学び

本川早苗 鈴木尚巳 岩沢智子 高橋邦江
片岡友子 寺本祐子

1 事例紹介

- ・ 90 歳代男性 要介護 5 80 歳代の妻と二人暮らし。娘や息子達とは疎遠。
- ・ 既往歴：脳梗塞後・心筋梗塞・16 年前、大腸癌、右上腹部コロストーマ造設。ガス抜き出来ないワンピースタイプのパウチ使用。
- ・ 身体状況：左半身不完全麻痺、移動・食事全介助。言語・聴覚障害なし。排泄はオムツ。
- ・ 介護状況：主介護者は妻で認知症、難聴、心疾患・腎疾患あり通院中。腰椎圧迫骨折の既往があるため下肢の痛みや痺れあり。

- ・ストーマ管理状況：ストーマ周囲に発赤や糜爛あり。パウチはガス抜きできず充満している。便処理やパウチ交換は、妻が 10 年以上自己流で実施。自己で出来るという自負あり。施設入所する前はほぼ毎日便漏れあり。その都度妻からデイサービスに連絡あり、デイサービスで入浴してパウチ交換。
- ・訪問看護導入までの経過：介護困難で施設入所していたが、夫婦共に自宅で暮らしたいとの希望で、1 か月程度で退所。一般状態観察、コロストーマ管理のため導入。
- ・関係職種：ケアマネージャー（以下 CM）、デイサービス（以下デイ）、ヘルパー、主治医、WOC、訪問看護（以下 NS）

2 倫理的配慮

今回の事例公表にあたり患者及び家族へ説明と同意を得た上、当院倫理審査（増子 H27-55）を通し実施している。

3 主な経緯

- 8/31 施設退所にあたり、担当者会議開催。在宅支援サービスについて話し合い、9/2 より訪問開始。
- 9/3 ストーマ外来受診（CM 同行）。処置方法の指導を受け、ガス抜きタイプのパウチに変更。剥がれの頻度は減少したが、便漏れはあり、処置継続。
- 9/24 発赤は軽減したが、便漏れが続き糜爛改善せず、NS が写真持参しストーマ外来に相談。ホール内径 35→25 mm へ変更。初期粘着時の重要性を確認し、他職種へ周知。
- 10/7 便の量が多い為、便が捨てやすいツーピースタイプへ変更。便処理はヘルパーと協働で行っていたが、便漏れは治まらず、糜爛も一進一退。

10/16 臨時担当者会議開催。ストーマ管理は、ヘルパー・NS で行うことを妻へ繰り返し説明する事や、便漏れ時の対応等を話し合った。新たに、妻はパウチ内に便が少しでもあると交換してしまうことがわかる。物品は NS 預かりとする。

11 月 便漏れは改善せず。妻が交換を行ってしまう状況が続く。金銭的な問題・人の出入りの煩わしさを理由に、訪問看護が一時中断となりかけたが、話し合いで継続になる。

11/21 妻が骨折し入院の為、急遽、本人は長期ショートステイ利用となり、訪問看護中断。

4 対応の振り返り

CM を中心に、ヘルパー、デイの関係スタッフが、利用者夫婦を理解されており、親身になって相談をうけていた。上記のようなイベントが次々と起こる中、ストーマ管理だけでなく、認知症の妻との関わりが最も重要ではなかったか、と感じ、3 か月の記録から振り返ってみた。（別表参照 p7-10）

5 考察

施設入所前後のサービスが大幅に変更となり、担当者会議は行ったが、妻はそれらの事を理解されないままサービスがスタートしてしまった。そうせざるを得ない状況だった。訪問当初、ストーマトラブルを早急に解決することを最重要と考え、CM やデイとの連携を密にしていた。しかし妻の認知症で物品が無くなってしまったり、NS に対して強い言動があったりし、妻への対応が重要であると感じ始めた。

また、噛み砕いた説明は繰り返ししていたが、どこかで、「言っても理解できないだろう」という気持ちがあり、ストーマについて早急にトラブルを解決するために、妻にすべてのことを説明せずに進めていた。

妻としては、状況が理解できないまま、様々なサービスが進められていくことに、混乱や不信感が起こりやすい状況であった可能性がある。後日、病院にお見舞いに行った時、妻より「話し合うのはいいけど、私抜きではいかんよ」という言葉があった。妻の、大変だという思い、長年パウチを交換してきたという自負、新しい変化による混乱を、もっと理解し、向き合うことが必要だった。

しかし訪問を繰り返すうちに、パウチ交換を少しは任せよう、という気持ちの変化が起こっており、体調不良の時は頼ってもらえるようになったのも事実である。金銭的な問題もあり、一時は訪問中止になりかけたが、妻の話に耳を傾け、真摯な態度を示すことによって、理解が得られ継続となった。

長年旅館を経営してきた経験から、人対人に対する心の部分は理解されていた。介入から 3 か月、わずかでも関わりに進歩は見られた。ここに至るまでに要した時間は長かったが、これだけの時間が必要だったと思う。時には、妻から NS に対しての強い言葉もあったが、「お母さん、この人はいい人だよ」という、本人から頂く言葉は、それを打ち消してしまうほどで、長年寄り添った夫婦が、お互いにお互いの欠点を分かりあい、補い合うやりとりに、こちらが涙することもあった。

このように、ようやく心が通じかけたところであったが、妻の骨折というアクシデント

があり、なんとも不消化な中断となってしまった。そのため、私たちは妻が退院したら、ぜひまた訪問させて頂きたいと願っている。「安心して相談できる人」をめざして！

以上

看護部だより 12 月号の感想

外来 主任 川元 早苗

「学生コーナーを読んで」

介助を必要とする患者さん、特にコミュニケーションが取りづらい患者さんが何を要求し、私たちはどのように手を差し伸べればよいのかを考えることは看護師にとって重要なことです。人は千差万別、同じ看護をしたのでは患者の本当の欲求に答えられていないかもしれません。常に患者に寄り添いながら、個人が持っている力を最大限に発揮できるような援助ができるよう、これからも頑張りたいと思います。

増子クリニック部署報告を読んで

12 月、透析従事者研修にて透析室の研修に行ってきました。20 年当院にいますが、初めてシャント穿刺を経験し、久しぶりにドキドキしました。シャントエコーの導入は、穿刺困難な患者さんに対し評価する事で、穿刺トラブルの減少につながっており患者さんにとってうれしいことですね。

以上